

外国人児童生徒等 教育・心理サポートについて

～ 小さな気づきから理解が始まります

NPO法人 Gコミュニティ
代表理事 本堂晴生

はじめに

小中学校内及びその日本語教室においては、日本人と外国人がお互いの「当たり前」の違いに気づくことで、多くのプラスを生み出すことができ、また、多くの誤解やトラブルを減らせると思います。

本講義では、その当たり前の違いについてお話させていただくとともに、違いを生かす「考え方」にも触れます。「考え方」を基に、個々のケースそれぞれへの取り組みを作ることができると思うからです。

外国人の児童生徒が学びやすい環境は、日本人の児童生徒にとっても学びやすい環境でしょう。これら児童生徒にとって、いろいろな文化の人と積極的に交流するという将来の能力の育成につながればと思います。

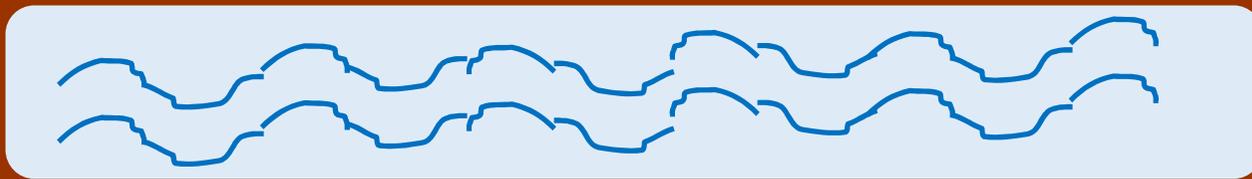
問題の取り組み方

基本問題（地下水脈）を見つけよう ⇒ 違いを生かす「考え方」

過去の事例（パターン・病名）に合わせようとするのではなく、
「考え方」から個々のケースの取り組み方を支援者が考える



表面の
様々な現象
(問題の木)



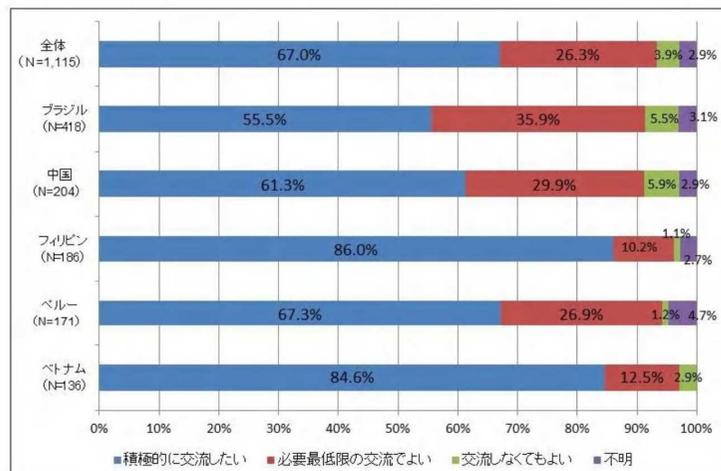
共通な基本問題
(地下水脈)
⇒ 「考え方」

1. 在住外国人及び日本人が抱えがちな問題

(1. 1) 群馬県住民アンケート調査（2016年実施）結果 【抜粋】

出典： 群馬県生活文化スポーツ部
人権男女・多文化共生課（当時）

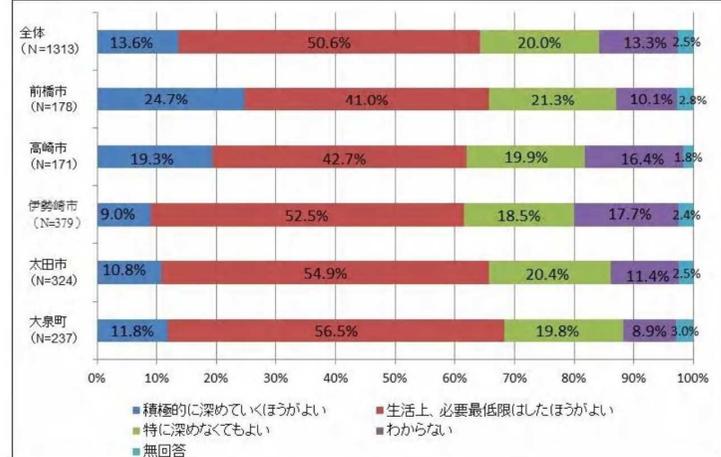
【問】日本人との交流についてどう思いますか。（外国人調査）



【問】日本人との交流についてどう思いますか
（外国人調査）

⇒ 「積極的に交流したい」 **67%**
「必要最低限の交流でよい」 **26%**

【問】お住まいの地域では、外国人住民との関わりは深めるべきだと思いますか。（日本人調査）



【問】お住まいの地域では、外国人住民との関わりは深めるべきだと思いますか。（日本人調査）

⇒ 「積極的に深めていくほうがよい」 **14%**
「生活上、必要最低限はしたほうがよい」 **51%**

外国人集住度の高い伊勢崎市（7%）、太田市（10%）、大泉町（7%）に対し、前橋市（25%）、高崎市（17%）と、2～3倍の差がある。

(1. 2) 外国人が日本の社会で生きていくために抱えがちな問題
(大人の場合)



日本語力に起因する問題が多い。

日本語がよくわからない

～ 仕事探しを派遣会社にまかせる

日本の生活習慣を学ぶ機会が少ない

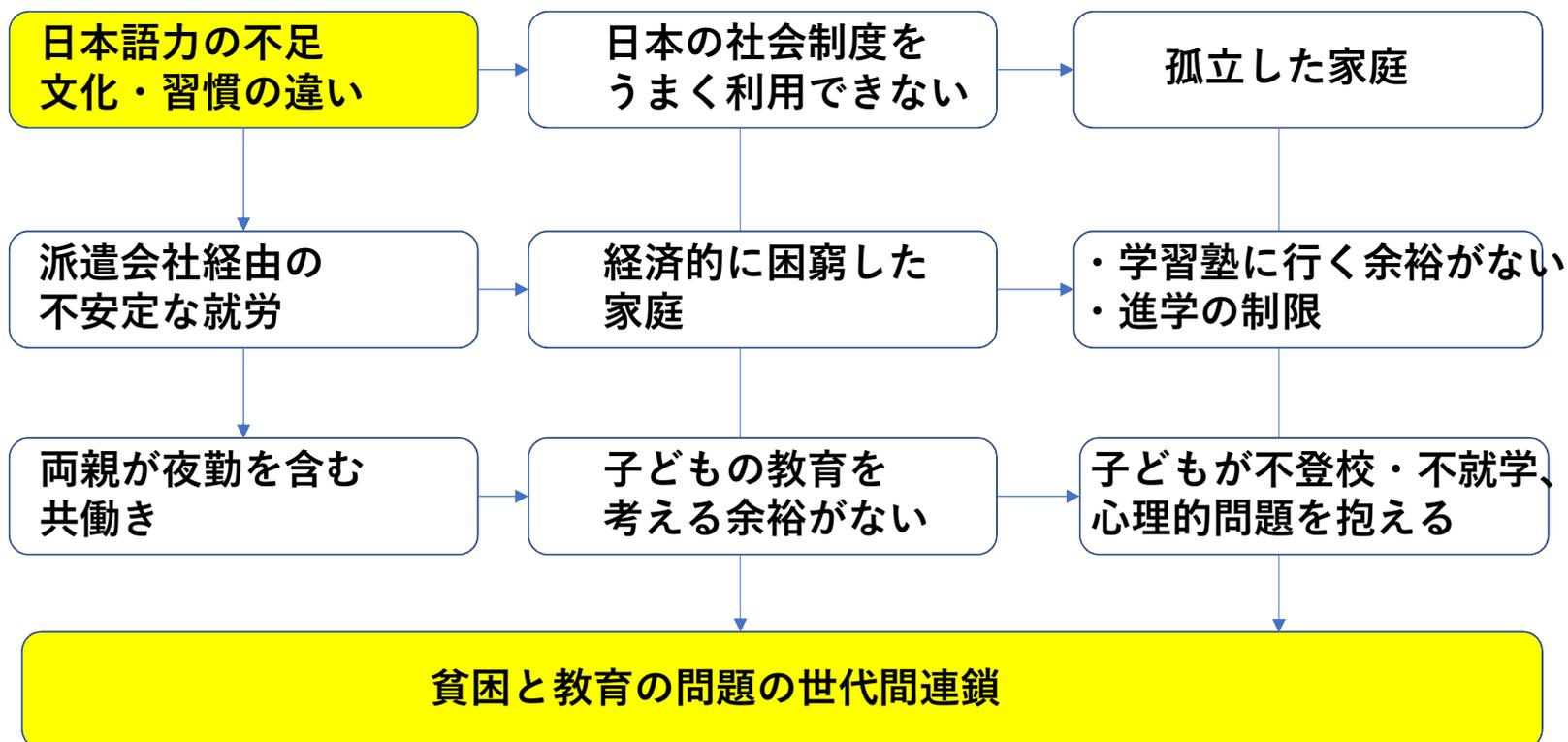
～ 日本人との付き合いが少ない

日本の税金・健康保険などの仕組みが難しい

～ 将来を描きにくい

親が置かれている状況から起きやすい 親の抱える問題

貧困と教育の問題の世代間連鎖



(1. 3) 外国人の子どもが日本の社会で生きていくために抱えがちな問題

日本語の読み書きが不十分

～ 学校の授業についていきにくい

親が日本の学校のことをよくわからない

～ 学校のことを親に相談しにくい

親を見ていても自分の将来を描きにくい

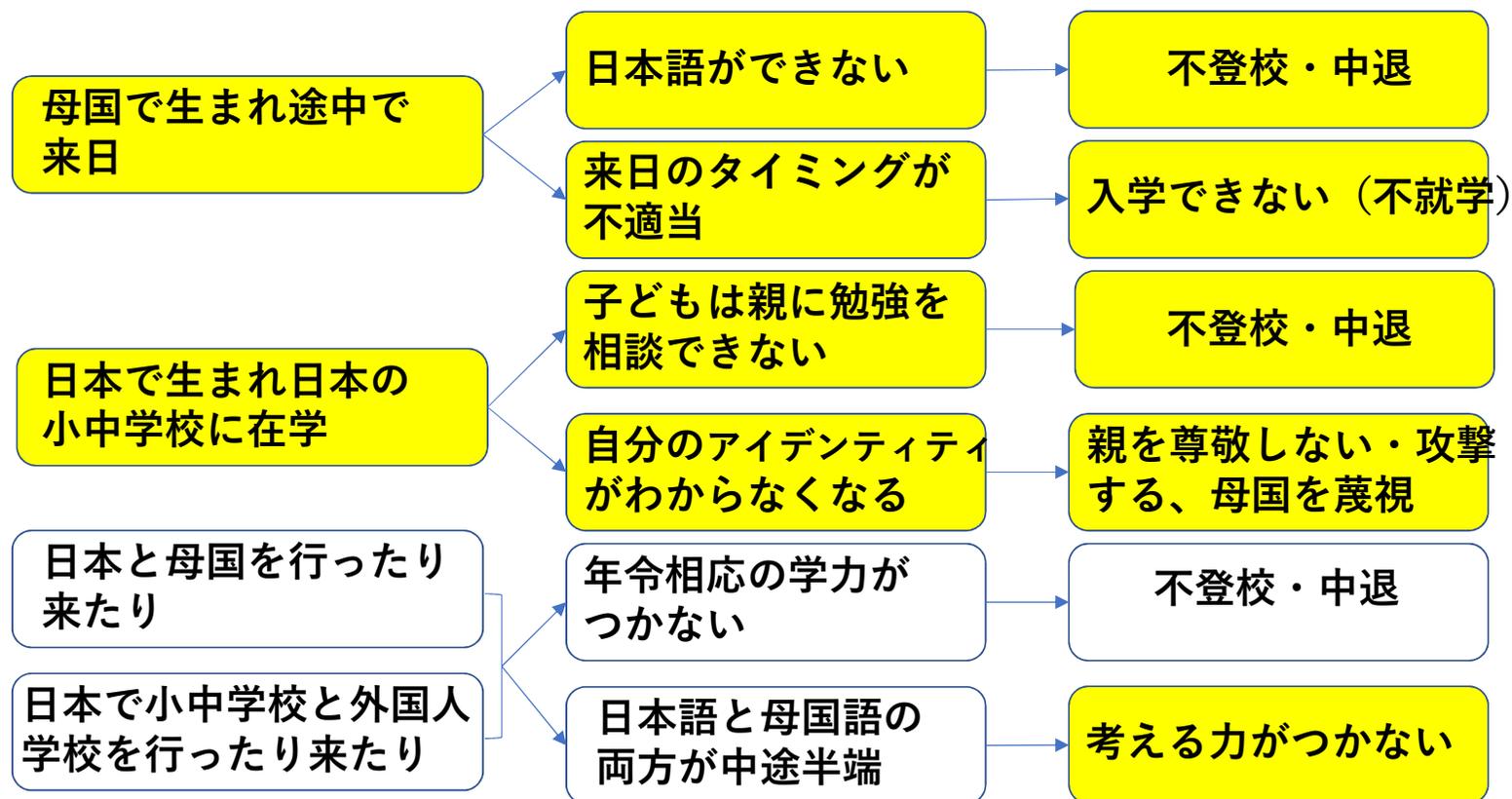
～ **日本の社会での選択肢が少ない**

日本語力に起因する問題が多い。



親の事情による移動から起きやすい子どもが抱える問題

子どもの人生の将来の選択肢（進学、職業）がせま
い



(1. 4) 日本人が直面する外国人との生活上の問題 (⇒学校の外での外国人児童生徒の環境)

- ① お互いに言語が通じない
 - ・ 相手に言いたいことがあっても伝えられない
 - ・ 相手を知ることができない
- ② 生活習慣の違いによるトラブル
 - ・ ゴミ出し、騒音、バーベキューの煙・におい
 - ・ 不法駐車
- ③ 文化の違い
 - ・ 個人の主張が強い
- ④ 日本人がしたとしてもあまり気にならないことを外国人がするととても気になる
- ⑤ 外国人との関わりでイヤな経験をすると、外国人を嫌いになりがち (外国人にとっての日本人も)

お互いに関わりたくない傾向が強い。

2. 問題の主な原因は「違いの気づきの有無」と「日本語力」

～ 小さな気づきから理解が始まります

2. 1) 学校制度や学校生活の「違い」の例

	日本	(例) ブラジル
義務教育の落第	なし	あり
授業参観	あり	なし (子どもが問題起こした時に親が呼ばれる)
家庭訪問	あり	なし (子どもが問題起こした時に先生が訪問)
運動会	あり	なし
長期休業の宿題、登校日	あり	なし
なわとび	あり	なし
プライバシーの範囲	学校の外も学校は見る	学校の外はプライベート
友だちの作り方	男子と女子は別 (中学)	男子と女子はいっしょ
宿泊 (保護者同行無し)	当たり前	親同行なしは親は大きな不安
心の問題への対応	チーム対応のしくみなし	チーム対応 (*) のしくみあり
心の問題への対応	教育心理士資格制度なし	教育心理士 (**) 資格制度あり

*: 精神科医、臨床心理士、教育心理士、ソーシャルワーカー、学校の先生などがチームで取り組むセンターがある。

** : 教育心理士は、学校に入って学校と一緒に対象児童生徒の教育方法を作る資格。

(2. 2) 各国の学校制度（義務教育）

日本の「当たり前」は各国では「当たり前」ではありません
 … 「落第がない」、「4月はじまり」



 : 義務教育

国名	学校制度			落第	学校年度	授業時間
日本	小学校 6年	中学校3年	高校 3年	なし	4月～3月	全日制授業
ブラジル	初等学校 9年		高校 3年	あり	2月～12月	半日制授業
ペルー	小学校 6年	中学校 5年		あり	4月～3月	半日制授業
フィリピン	初等学校 6年	中等学校 6年		あり	6月～3月	半日制授業
ベトナム	小学校 5年	中学校 4年	高校 3年	あり	9月～5月	半日制授業
中国	小学校 6年	中学校3年	高校 3年	あり	9月～7月	全日制授業
韓国	小学校 6年	中学校3年	高校 3年	あり	3月～2月	全日制授業

それぞれの「当たり前」
が異なる。

- 注)・ 学校制度の「初等学校」などの呼び方は、国により異なります。上表では、便宜上、日本に似せた呼び方としました。
- ・ 授業時間は、同じ国の中でも学校により異なる場合があります。また、ペルーでは夜間部もあります。

(2. 3) 各国の学校生活（小中学校）

国名	部活動	運動会	給食	長期休業	授業参観	家庭訪問
日本	ある	ある	ある	宿題がある	ある	ある
ブラジル		ない	ある	宿題や登校日はない	ない	ない
ペルー		ある	ない		ない	ない
フィリピン	ない	スポーツ大会			ある・ ない	ある・ ない
ベトナム	ある	自由参加	小学校は 学校食堂	宿題出す こともある	ある	
中国	ない	ある	ある		ない	ない
韓国	ある	ある	ある	宿題多い	ある	

注) ・上記は公立学校での一般的な内容。私立学校は異なる。空欄は不明。

・出典：外務省及び千葉県教育委員会のホームページほか

義務教育の落第

親（例：ブラジル人）は子どもが日本の小学校で、2年生、3年生と進級したので勉強がわかるようになったのだ、と思っていたら、その子が中学校に入ったら学校に行きたくない、と言う。そこで初めて日本の義務教育には落第がないことを知った。

（ブラジルでは、学年ごとに進級試験がある。成績が満たなければ落第がある）

授業参観

親（例：ブラジル人）は子どもを日本の学校に入学させた時に、学校の先生から「授業参観」があることを説明された。実際に通知が来た時に、親は子どもに、何か悪いことしたか？と聞き、子どもは、何もしてない、と答えた。親は、行かなくて良い、と判断し、行かなかった。学校の先生としては、説明したのに来ないので、「教育不熱心な親」と思ってしまう。

（ブラジルでは、子どもが問題を起こした時だけ、親が学校に呼ばれ、先生が家庭訪問をする。）

なわとび

児童（例：ブラジル人）は小学校でなわとびがうまくできず、まわりの日本人児童からバカにされた。次の時もバカにされケンカになった。ブラジルの小学校ではなわとびはない。事前に日本人児童にそのことを伝えてあれば、バカにするのではなく、なかよく教えてくれたかもしれない。

プライバシーの文化の違い

不登校になった外国人児童（例：ブラジル人）が、エステに行ったりスイミングスクールに行ったりという情報が学校に入った。学校としては、それならば学校に来るべきという思い。

親は、子どもが家にこもっているので、気分転換になればということで、まゆげを手入れしに行った。また、泳ぎが好きなのでスイミングに連れて行った。親からすると、これらはプライベートなこと。

プライバシーの文化の違いを知らないことから、お互いに不信感を持つ。

◆日本とブラジルでは学校生活での友だちの作り方が違う。

日本	ブラジル
初めて入る場所ではこちらからはあまり話しかけず、まわりから話しかけられるのを待つ	こちらからどんどん話しかけて友だちになる
男子は男子、女子は女子の友だちの場合が多い	男子も女子もお互いに友だちになるのが自然
グループができやすい。「リーダー」がいる。グループの誰かが他のグループの嫌いな生徒と付き合いと仲間はずれのようにされることがある	グループでかたまることはあまりしないし、従って、グループのリーダーもいない

事例：

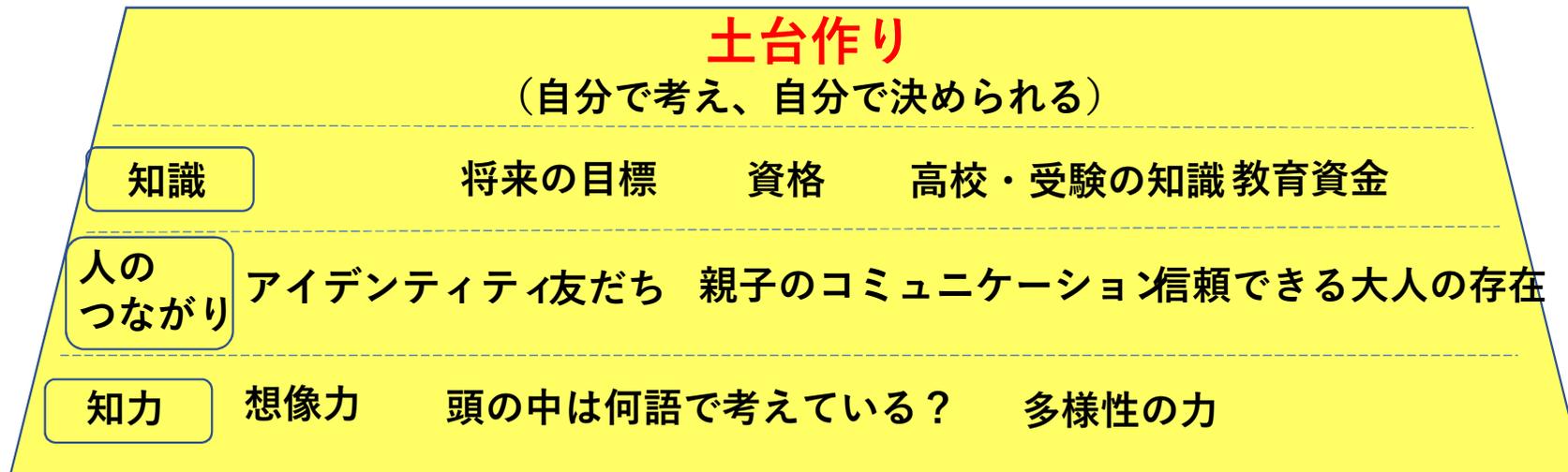
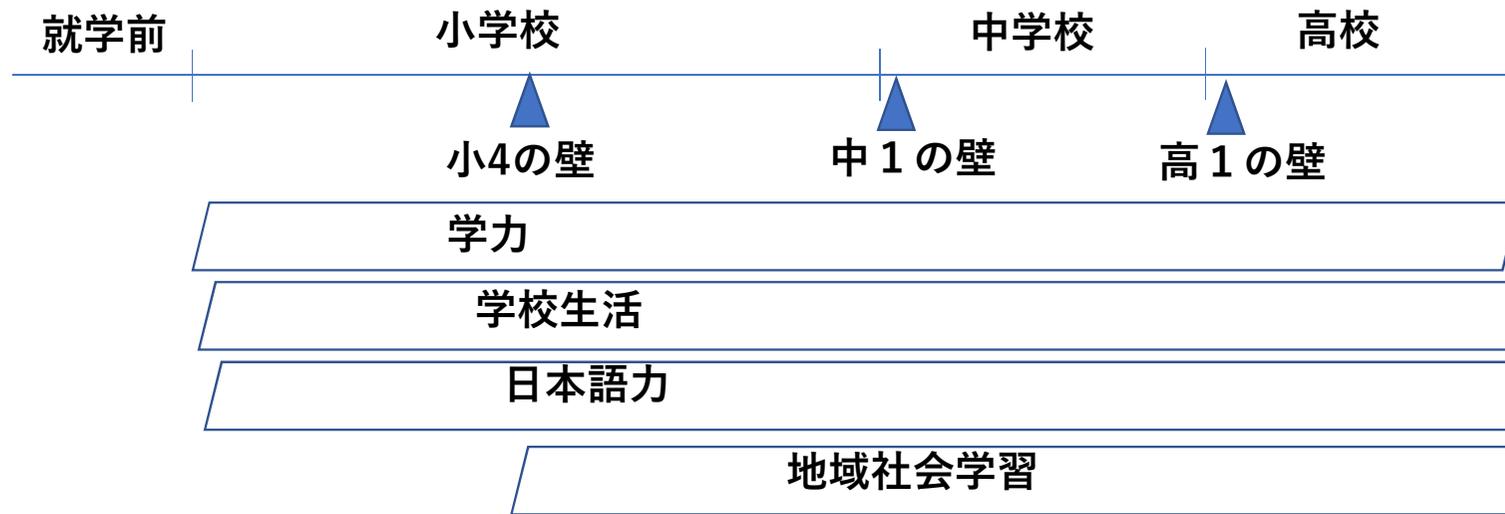
ブラジルから来た女子が、日本の中学校の2年に入った。
自然のこととして「ブラジル流」でまわりの男子、女子に積極的にアプローチした。日本人の女子生徒たちから「あの子はなんなの！」と見られ浮いてしまった。
結局中退してしまった。

- もしまわりの大人がこの文化の違いを知っていて、事前に生徒たちに話をしていたら、もしかすると興味を持たれ「ブラジル流」が人気になったかもしれない。
違いがあることを少し知ることでお互いの違いについて考え、認め合うことになる。

多くの問題は、
「違い」を知らない
ことから起きる。

3. 外国人児童生徒の自律支援 ～ 土台作り (民間支援の経験から)

自律： 自分で考え、自分で決められる



将来の目標があるとがんばれる

事例1 太田フレックス高校の学習支援で継続した生徒は
将来の目標を持っていた

(自動車整備士、デザイナーなど)

事例2 日本語教室に来ていた中学1年の生徒に「将来の夢」を
聞いたら、遠慮しがちに「弁護士」と答えた。

翌日、「先生に弁護士と言ったら、なれるわけない、と
言われた」とはにかみ笑顔で話した。

事例3 外国人児童生徒に将来の夢を聞くと「わからない」「通訳」
と答えることが多い。

⇒ 課題： **親も子も日本の職業について知識が不足。**

派遣会社経由の仕事をしている親を見ても日本の職業に
ついてイメージがわからない。

⇒ 対応： 親子向けの日本の職業の説明会の開催

(主な職種、収入、必要な資格、外国人がつかない職業、適性)

友だちがいるとがんばれる

事例 小学3年の時に来日し日本の小学校に入ったが、日本語が不十分で1年で外国人学校に転校した。親の都合で小学5年の時に帰国し、小学6年で再来日し外国人学校に入ったが、経営不振で学校が無くなり、学校には行かず母国の通信教育を受講。

中学2年の時に「虹の掛け橋教室」に入室し、2年の3学期に日本の中学校に入った。日本語が不十分であったが、いっしょに通う友だちがいたので、卒業まで毎日通学した。

(現在は日本の大学の4年生)

- ⇒ **課題：** 途中で来日した子はショックが大きい（特に、母国で成績が良かったりとても楽しく学校生活を送っていた子はなおさら）
- ⇒ **対応：** 先に入学している同じ母国の生徒と、最初同じクラスになるようにすると良いと思われる。

親と子のコミュニケーション

事例 日本生まれの子どもは、日本の学校で日本語が上達してくるとともに母国語を忘れがちになる。一方で親は日本語が不十分なままであるため、子どもが学校のことや悩みを相談しても深いコミュニケーションができない。

親を尊敬しなくなったり攻撃したりするケースがある。

不登校になって来た時などに、子どもはどこにも居場所がなくなる。

⇒ **課題：** 子どもも親もどこに相談したらよいかわからない。

⇒ **対応：** 家庭では母国語で話をするこことで、親子のコミュニケーションを確保しやすくする。

事態が進んでしまっている場合は、親は日本語を、子どもは母国語を学ぶ機会を作る。

頭の中は何語で考えている？

事例 日本生まれの中学2年の生徒。家庭では母国語で話をして学校では日本語で話をしている。「頭の中は何語で考えている？」と聞いたら、「日本語」との返事。その生徒の漢字のレベルは小学校3、4年生。ということは、考えるための抽象言語の語彙が少ない。

とてもおとなしい子なので、多分小学校でもクラスで目立たず問題が見えにくいまま進級したのかもしれない。
(太田フレックス高校に入学し、その5月に退学した)

母国語：
国籍のある国の公用語
または国語
母語：
頭の中で考える時に
使う言語。第1言語。

⇒ **課題：** 日本語も母国語も中途半端な子がいる。生活言語は話せるので、「考える力」が見逃されがち。

⇒ **対応：**

- ① 幼児期から読み聞かせなどで想像力を養うことで、小学校に入学してからも自力で学習する可能性が高まる。
- ② 一つで良いので言語力（母語）が確立できていれば、そこから他の言語を学ぶことができる。

受験の面接と作文の練習は 自分をみつめるチャンス

事例 受験の面接と作文の質問は、過去、現在、未来で構成されている。過去（中学校でがんばったこと）、現在（なぜこの高校に入学したい？）、未来（高校を卒業したら何をしたい？）など。外国人生徒の中には、志望理由や将来何になりたい、が最初わからない子がいる。1対1で向き合いながら、生徒の思いや考えをゆっくり聞くことで、回数を重ねるごとに**生徒自身の考えができてくる**。

本番の受験面接などに有効であるし、なによりも高校入学後に自分の考えで学習に取り組みやすくなると思う。

- ⇒ 課題： 外国人の子には、苦しい場面でなんとかそれをそらすことで生きて来ざるを得なかった子がいる。今まで自分の人生を突き詰めて考えた経験がない。
- ⇒ 対応（NPOの場合）： 1対1でじっくり聞いてあげることで、親との間でもできにくかった、自分の人生を見つめ直すことを後押しする。

親と子が情報を共有

事例 外国人の親も子も日本の学校制度や受験のしくみに
ついて知識が乏しいことがある。せっかくの学校での三者面談
や進路説明会の話が理解しにくい。

また、公立の場合、高校までや、中には大学まで教育費が
無料の国がある。日本でかかる教育費の知識がないと、土壇場
で知る事になりお金の準備に苦労することになった。

⇒ **課題**： 日本の学校制度についての知識が乏しいと、母国の
学校制度の知識で考えてしまい、日本の現実とギャップを味わう
ことになる。それが子どもの将来の選択肢に影響することがある。

⇒ **対応（NPOの場合）**： 相談があった場合、親子で来てもらい
面談をして、学校制度、教育資金などについてじっくり説明する。
質問も多く出るので、通常1時間半～2時間をその親子にかける。

親子が知識を共有することで、家庭でも相談し合うことができる。

アイデンティティ

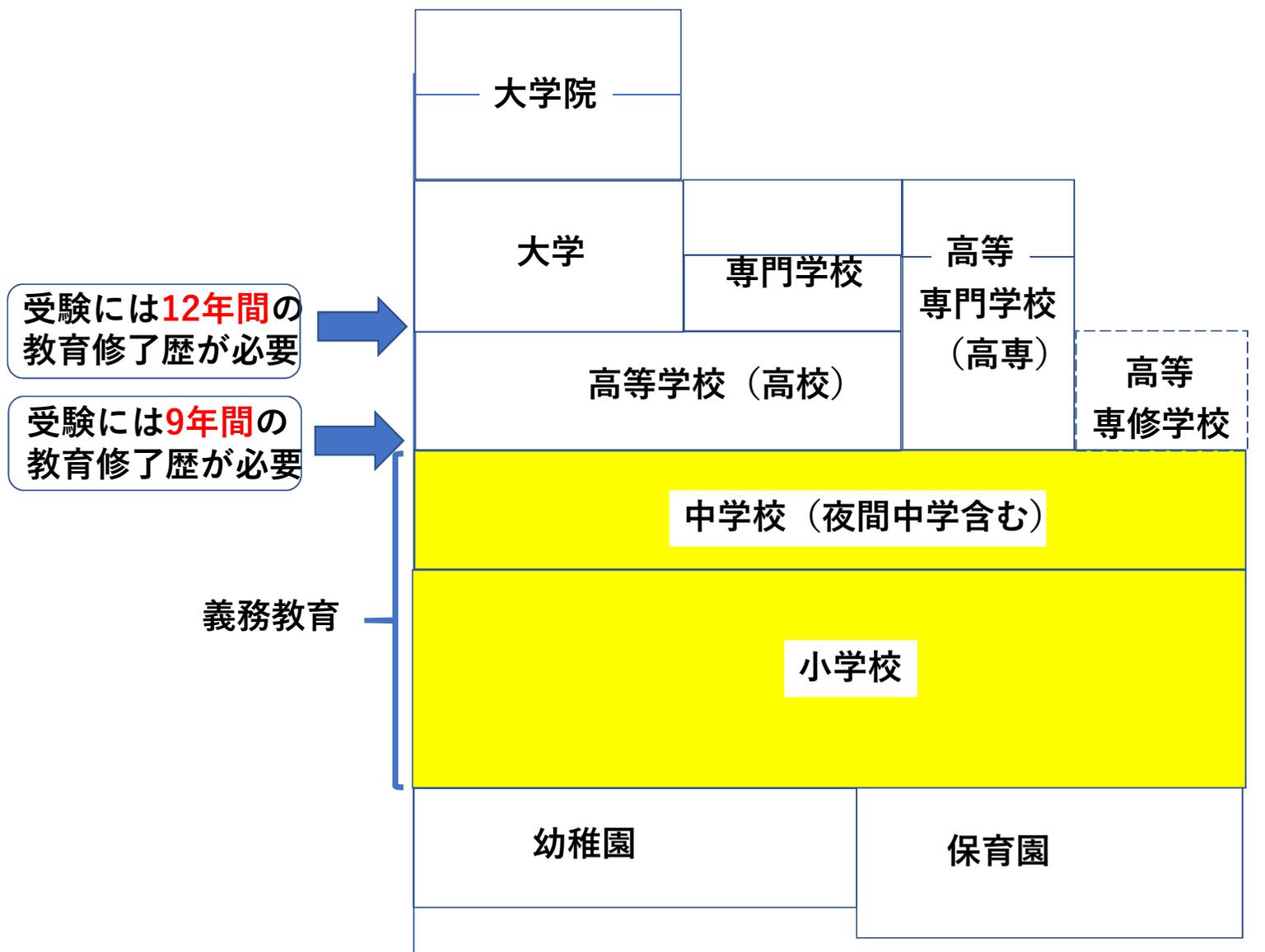
事例1 日本生まれの小学2年生が、NPOの日本語教室で外国人として紹介された時、「ぼくは日本の名前なので日本人です」と主張した。顔立ちが外国人であり、多分その子の心の中に何かわだかまりが芽生えてきているのだと思う。

事例2 日本生まれの生徒で、日本の高校を卒業したが、自分のアイデンティティにずっと迷いがあった。卒業後初めて母国に1年間行き生活をした。その経験で、「ぼくは自分のアイデンティティがはっきりしたと感じました」。

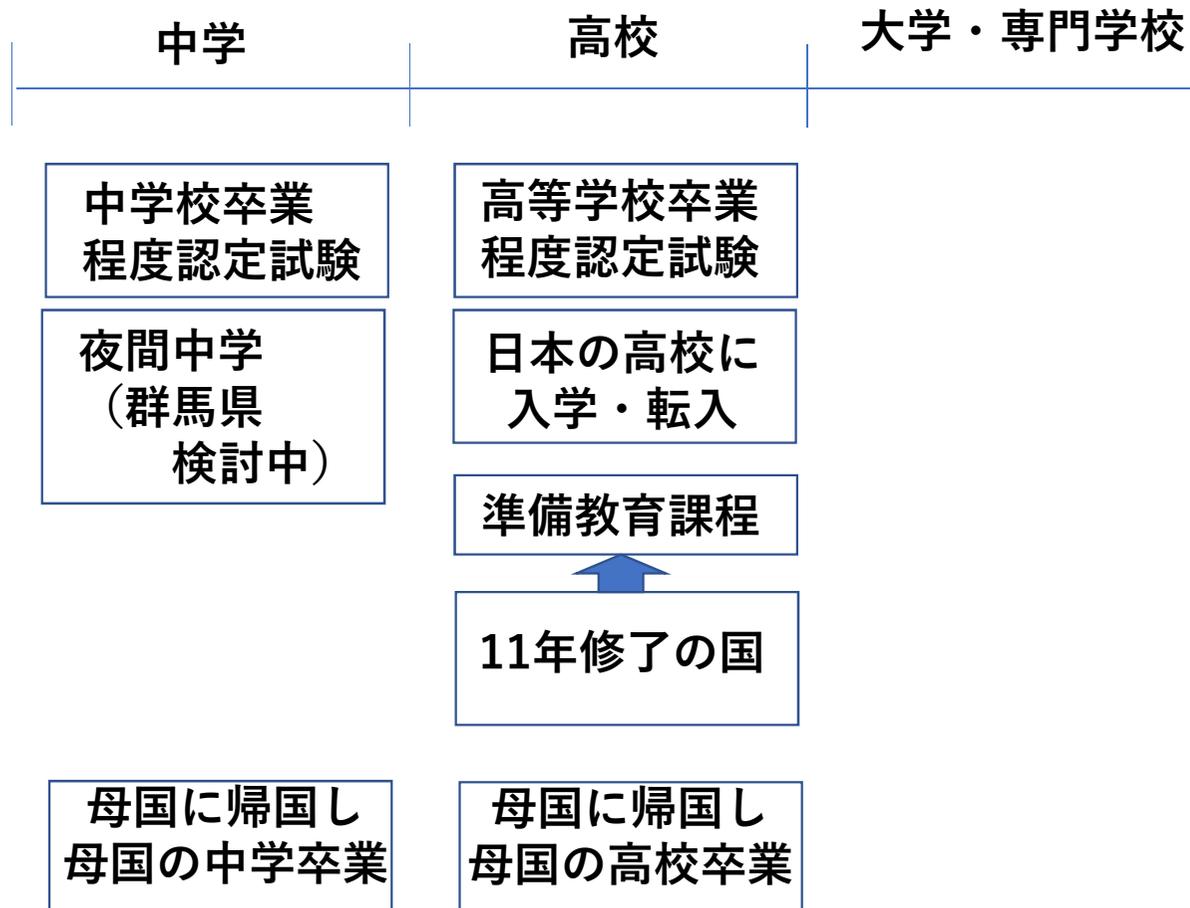
⇒ 課題： 人生で何か問題に直面した時に、**自分のアイデンティティがはっきりしないことが自信の無さ**となることがある。時には親や母国の蔑視につながることもある。

⇒ 対応： 何かの機会に自分自身でふんぎりをつける事なのだろうと思う。その「機会」は、母国に実際に行くことであったり、母親がアイデンティティを強く持っていることなどであったりする。

日本の学校の種類と外国人の入学条件



進学するための教育歴年数不足のケース 受験資格取得の対応例



～ 日本の義務教育についておさらい ～

「外国人の子どもは義務教育ではない！」が前面に出がち

「義務教育」は日本国憲法
で規定（親の義務）

日本国憲法は「国民」
が対象

外国籍は対象外

国際人権条約により、就学を希望すれば日本人と同様の教育を受けることができる（子どもの権利）

日本は学齢主義… 年齢で学年が決まる。 世界でも数少ない制度

日本は落第が無い… 相応の学力がなくても進級する。世界でも数少ない制度

日本国憲法第26条第2項

国際人権A規約第13条

外国人児童生徒の就学機会

文部科学省が通知により外国人児童生徒の対応として認めていること

児童生徒の日本語力のレベルにより下の学年にて受け入れても良い
(**下学年への編入**)

中学の学齢を過ぎていても中学に受け入れて良い
(**学齢超過の編入**)

いづれも学校長判断（≡教育委員会判断）で実施して良い

現実には

県、市により対応はまちまち

事例： 実際に発生した問題

A県B市で中学の下学年編入と過年齢編入を認められて中学在学中の姉弟がC県D市に引っ越しをしようとしたらD市はいずれも認めない。学籍継承されない。

⇒ D市では姉は不就学になってしまうし、弟はすぐの高校受験になってしまう

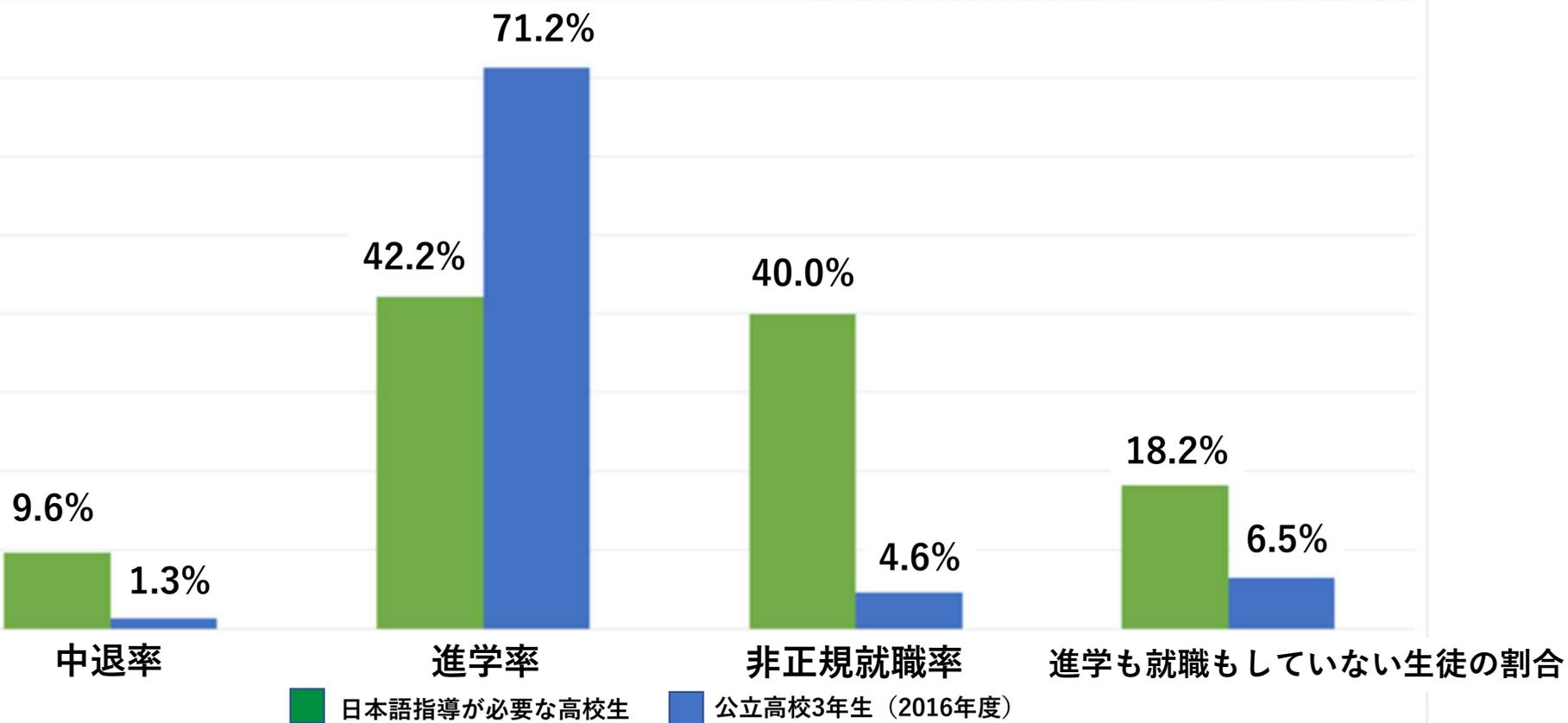
5年前、E県F市で、来日した15才の生徒が12月に中学3年への編入を申請したが認められなかった（← 子どもの権利条約に反します）。下学年編入も認めていない。

⇒ やむを得ないので中学校卒業程度認定試験受験を目指す
（年1回 10月末頃 5教科の試験）

日本語指導が必要な高校生の現状 (⇒小中学校の次の段階での状況)

日本語指導が必要な高校生の現状

朝日新聞2018年9月30日『日本語教育が必要な生徒、1割弱中退 公立高平均の7倍超』掲載データより筆者作成



出典： 文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成30年度版）」記載のデータから田中宝紀氏作成

23年度にも高校教育で日本語学習が正式な単位へ →外国籍の高校生の教育充実へ

日本語指導を必要とする児童生徒などへの主な取組

- ・人数に応じて教員を配置
- ・教員が指導方法を学べるプログラムを開発
- ・外国籍の子どもの就学状況を調査

県教委 義務教育課 「外国人の子供等の就学に関する検討会」 (令和2年度)

WG1：就学促進対策 (不就学ゼロを目指すために必要な取組)

WG2：教材や研修 (学校で必要な教材、翻訳文、教員や支援員が受けるべき研修)

WG3：包括的支援 (文化・生活習慣の違い等による不安をなくし、安心して学校生活を送るために必要なこと)

- 課題
- ① 外国人児童生徒の不登校率が県全体の率よりも高い
 - ② 散在地域での支援ニーズ増への対応
 - ③ 県内の外国人支援団体・機関と学校とのつながり
 - ④ 外国人児童生徒を受け入れる側の「異文化理解・多文化共生の考え方に基づいた教育」の充実

- 目標
- ① 支援ネットワークづくり
 - ② 多文化共生教育の推進

- 具体化
- ① 情報発信・共有のポータルサイト (支援団体一覧を含む) 構築
 - ② 進路選択・キャリア教育の促進 ⇒ キャリア形成に関する動画作成
 - ③ 多文化共生・異文化理解に役立つ資料作成

【参考】 包括的支援 ～ 私（本堂）なりの視点

支援は最終目的ではなく、何かを変えるための道具（手段）

誰が

誰を

何を支援して
(問題の何を)

どうなるようにしたいのか
(どう変えたいのか)

【例】

ボランティア
JLT
学校の先生
教委の人
SC・SSW
地域の人

児童生徒
就学前の子供
不登校児童生徒
保護者

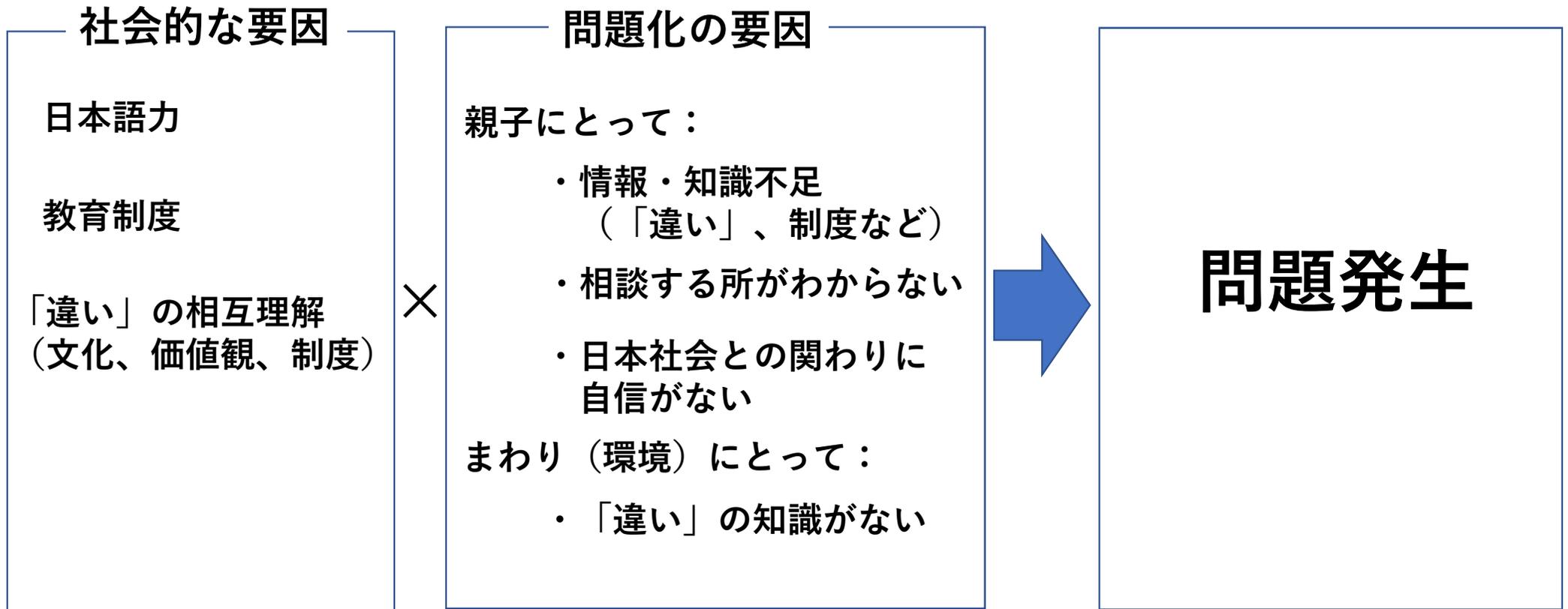
日本語学習
教科学習
不登校
進学
就職
学校生活
考える力
心理の問題

人生の選択肢を広げる

「自分で考え自分で決める
ことのできる」環境づくり

↓
ネットワーク、
つながり

外国人児童生徒の抱えがちな問題（問題の要因のまとめ）



3. NPOなど民間による教育支援の事例と課題

(3. 1) 地域のNPOの取り組み (NPO法人 Gコミュニティほか)

日本語を学ぶことはとても大事です。それに加えて…

外国人の子どもにとって日本語を学ぶことは最終目的ではなく、自分の人生の選択肢を広げるための道具です

道具を使える環境づくり … 教育支援の広がり

自分で考え・
決められる力
の養成

進学説明会・
職業説明会

母国語による
教育相談

母国語による
心理カウンセリ
ング

日本語・
教科学習支援
(学校内外)

機会を自分で
作る力の養成

中学校卒業程度認定試験の支援

高等学校卒業程度認定試験の支援

奨学金・教育ローンの情報支援

身近に相談
できる地域の
力の養成

外国人コミュニ
ティコーディネー
ター養成

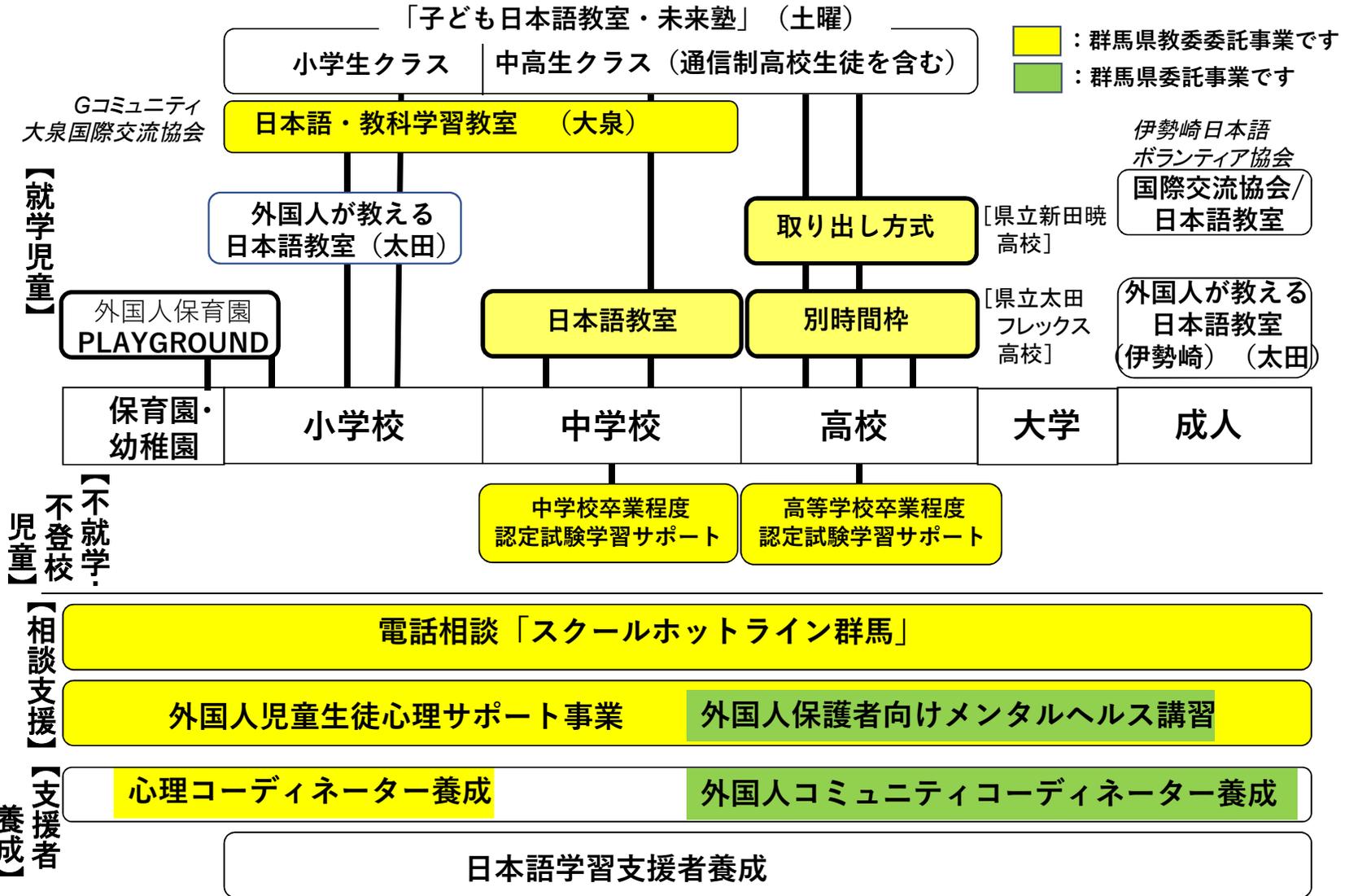
心理コーディネー
ター養成

外国人が教える
日本語教室
(兼交流センター)

日本社会で一人一人の
将来の選択肢を広げられ
ることが共生につながる。

(3.2) 民間の活動による外国人児童生徒学習支援の主なとりくみ

支援団体の記載がない支援はGコミュニティです



人生に寄り添う支援
をする
(必要に応じて)

(3.3) 学校内外での学習支援(2012年度～現在9年目)

(1) 学校内支援

- ① 外国人生徒の多い学校での支援 (2012年度～2020年度、継続)

群馬県立太田フレックス高校 【別時間枠】	週1回	延べ82名
	各回4時間枠	

- ② 外国人生徒の少ない中学校での支援 (2018年10月～2019年3月、終了)

伊勢崎市立あずま中学校 【校時内・放課後】	週2～3回	1名
	各回1校時～1時間半	

- ③ 外国人生徒の少ない高校での支援 (2019年10月～2020年3月、継続)

群馬県立新田暁高校 【校時内】	週1回	1名
	各回2校時	

(2) 学校外支援 … 不就学生徒の支援

- ① 中之条 フィリピン人生徒1人 (母国学歴10年) 週2回
【外国人散在地域】 2018年5月～2019年3月 ⇒ 県立渋川青翠高校合格 (継続支援)

- ② 前橋 パキスタン人生徒1人 (母国学歴9年) 週2回～3回
【外国人散在地域】 2020年3月～2021年3月 県立前橋清陵高校合格

(3.4) 母国語による教育相談、心理カウンセリング

(2015年度～現在7年目)

- … 母国語（ポルトガル語、スペイン語、英語）対応による支援
- … 教育委員会、学校、発達支援センターとの連携
- … 母国語対応できるコーディネーターによる円滑な支援

母国語による教育相談 (スクールホットライン群馬)

延べ258名

- ・ 電話相談
（月）～（土）夜9時まで可能
- ・ 面談 ・ 訪問同行 ・ メール

主な相談内容

- ・ 日本語・教科学習
- ・ 進学・受験・教育資金
- ・ 入学・編入・不就学、不登校

母国語による心理カウンセリング

延べ204名

- ・ 毎月各1回
 - ① スペイン語、英語、日本語
 - ② ポルトガル語
- ・ 1回で終わることはなく、中長期にわたる

主な相談内容

- ・ 不登校 ・ 学校・家庭内で暴力・不適応
- ・ 自閉症 ・ 発達障害 ・ 離婚が児童へ影響
- ・ 親子コミュニケーション

母国語による教育相談(スクールホットライン群馬)

2015年6月～2020年4月の実績 (4年10か月)

相談対象の児童生徒の数 223 人

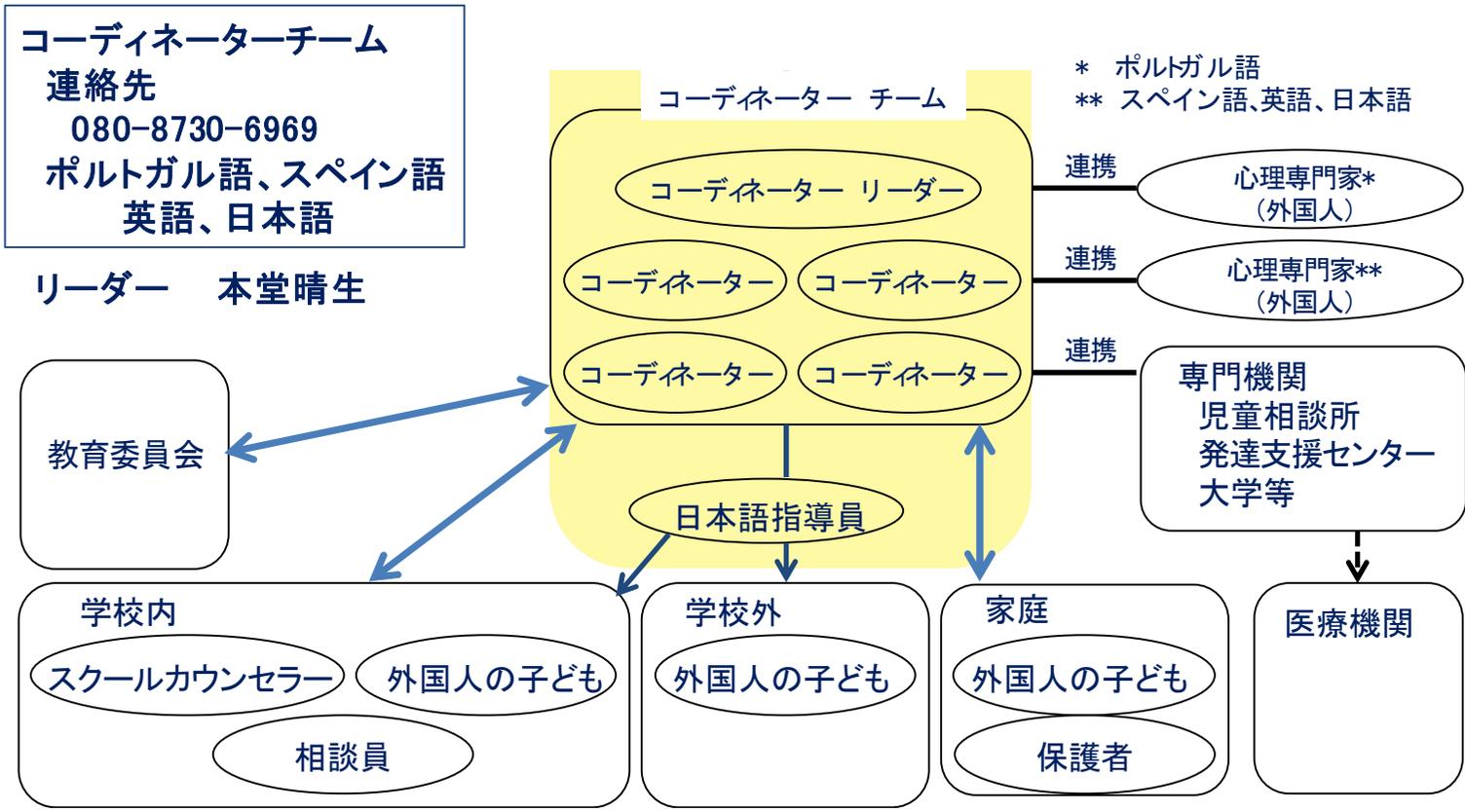
支援回数 (電話、面談等) 634 回

【主な相談内容】



心理サポート体制

(母国語による心理カウンセリング)



心理的問題は、
抱え込みやすい。

いずれの事業も支援の考え方は『自律の後押し』
自律：自分で考えることができ、自分で決めることができる

母国語による心理サポート及び心理カウンセリング

2015年6月～2020年12月の実績(5年7か月)

相談対象の児童生徒の数 215 人

支援回数(電話、面談) 842 回

内 専門家による
心理カウンセリング回数 412 回

主な相談内容例

- ・ 不登校
- ・ 学校・家庭内で暴力・不適応
- ・ 自閉症
- ・ 発達障害
- ・ 離婚が児童へ影響
- ・ 親子のコミュニケーション

(3.5) 地域のコーディネーター養成

(2015年度～現在7年目)

＊問題を把握し、専門家・専門機関につなぐ人

- … 近くで最初に相談できる
どこに相談したらよいかわからず深刻化するのを防ぐ
- … 受講者の中から地域のキーパーソンを見出す

外国人コミュニティコーディネーター

受講者延べ98名

- ・養成講座
8回講義のシリーズを毎年1回
- ・質疑応答を重視
- ・有志が「外国人が教える日本語教室」

今までの主な講義テーマ

- ・社会制度（学校、税金、健保、年金）
- ・病院・住居・日本語指導法・介護
- ・民生委員・少年院・児童相談所

心理コーディネーター

受講者延べ150名

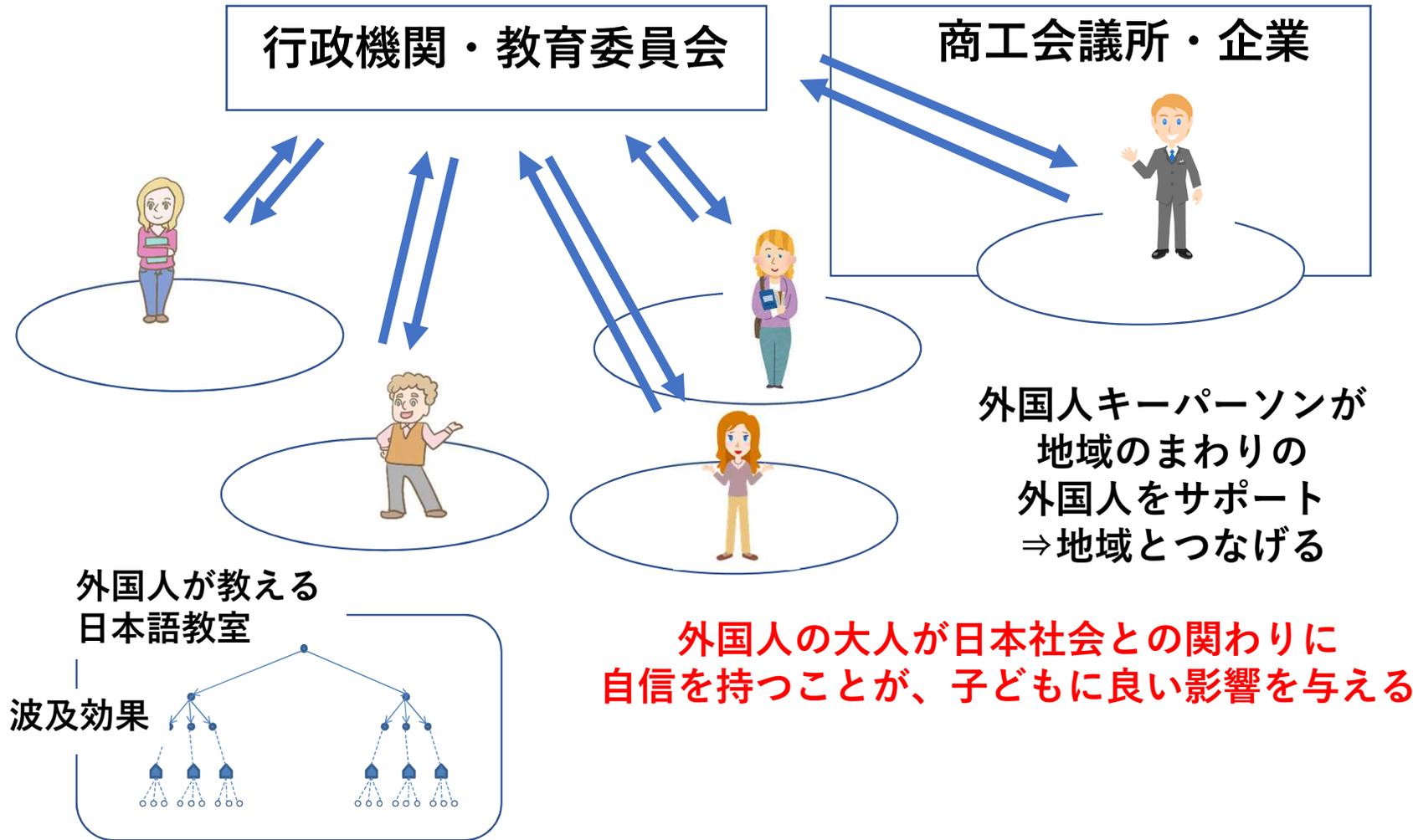
- ・養成講座
5回～7回講義のシリーズを年1回
- ・講師：大学の専門家
- ・受講者は外国人及び日本人

今までの主な講義テーマ

- ・発達障害 ・病の見分け方と支援
- ・家族の心理支援 ・ケーススタディ
- ・支援者のメンタルヘルス

外国人キーパーソン育成による自発的ネットワーク

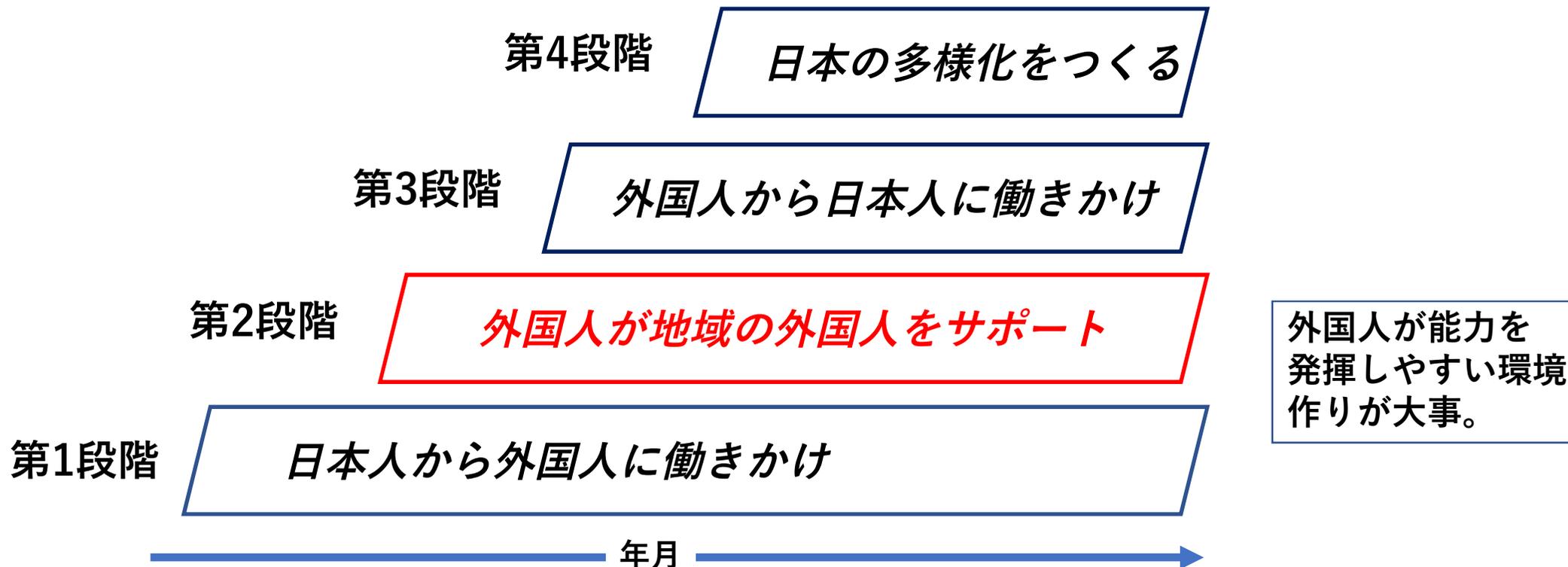
* 日本語能力が高く、日本の社会制度の基礎知識を持つ。日本語指導力もある。



4. 「違いを生かす」ための考え方 ～一人一人が自分の多文化共生を作るために～

問題やその背景は、生徒一人一人異なります。
支援者は「考え方」を持つことで、個々のケースの
取り組みを自ら考え作ることができるでしょう。

(4. 1) 多文化共生により日本人と外国人の関係が多様に発展



外国人が能力を
発揮しやすい環境
作りが大事。

日本社会で従来受け身になりがちであった在住外国人が、積極的に自ら日本人に働きかけることができることで、より対等な関係が構築され、外国人の持つ多様性が共生を通して日本社会や地域社会の新たな活力源になるのではないのでしょうか。

多様化： 人々がいろいろな違いを認め合い、新しいことをつくる

(4. 2) 在住外国人の増加に伴う地域の溝の拡大を防ぐ

⇒ お互いの違いを知ることで、新たな「**近助**」になる

概念	<ul style="list-style-type: none">・ 多様性は良い・ 違いを認め合う
制度	<ul style="list-style-type: none">・ 社会制度 (税金、年金、健保他)・ 教育制度
生活習慣・文化	

今後、外国人が増えるにつれて積極的に交流したいと思わない日本人との溝が顕在化するのでは。

これを**ポジティブなものに転化**をさせる交流・考え方により**問題を予防する**

… 騒音・ゴミ出しなど**生活習慣レベルの違いが溝を作る**

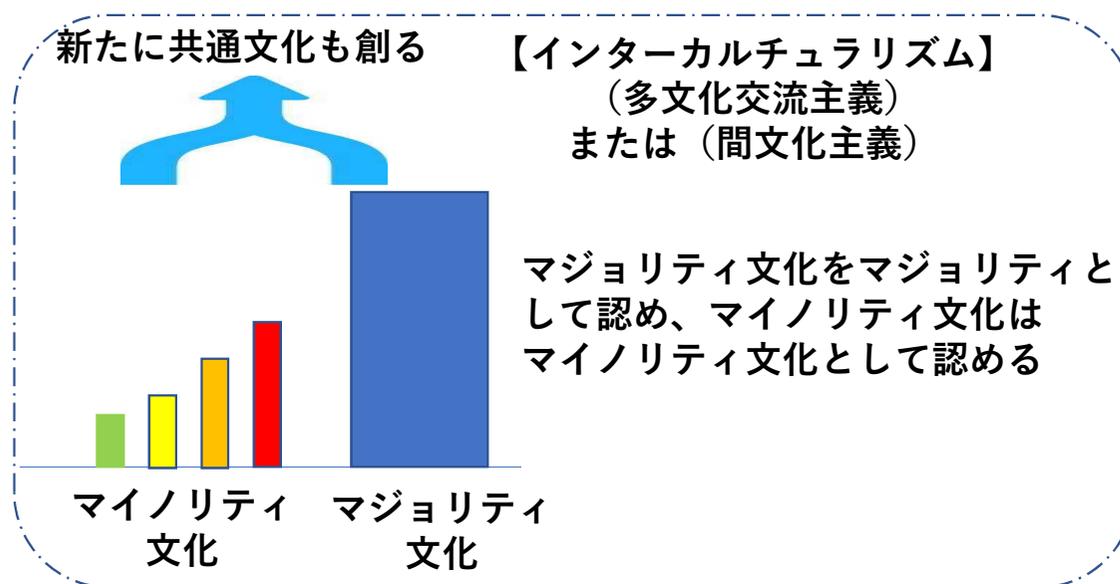
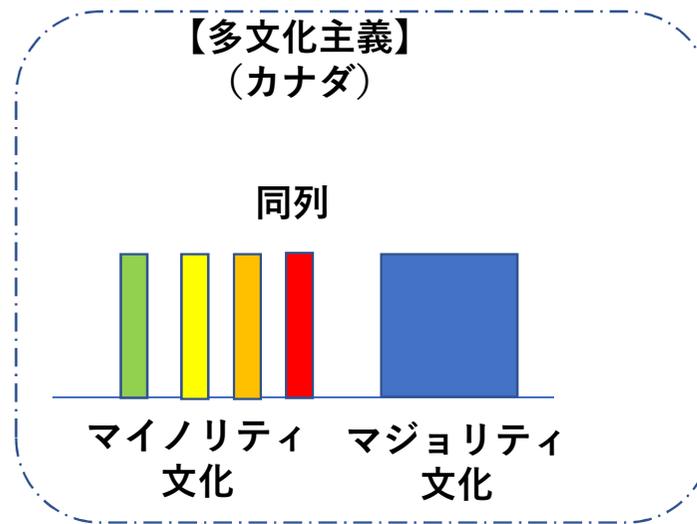
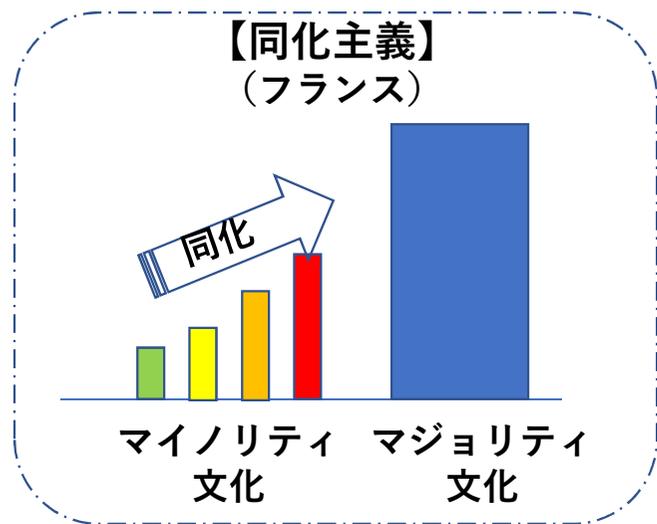


知識・情報の習得

体感する交流

生活レベルの溝が広がるままであると、多文化共生が足元から崩れかねない。

(4.3) 概念



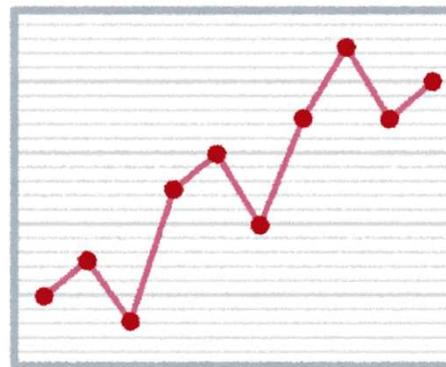
日本に適しているのは
インターカルチャリ
ズムと思われる。
日本版のインターカル
チャリズムを作る
のが良いのでは。

(4. 4) 「違いを生かす」ための考え方

(4.4) -1 相手を知ることについて

「違い」が、差別につながっていくのか、それとも自分を高めることにつながっていくのかの分かれめは、**相手を相手の価値観で知ることができれば自分を高めることができ、相手を自分の価値観だけで見るならば差別につながっていく。**

自分の価値観だけで見ることは相手を知ることにならないから。



お互いの「当たり前」が異なっていることを知る。新たな共通の「当たり前」を目指す。

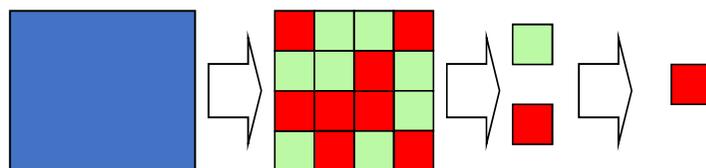
相手を相手の価値観で知ることが、多様なグローバル（地球）な世界で活躍する大事なカギ。

※「価値観」：良い、悪い、好き、嫌いの考え方

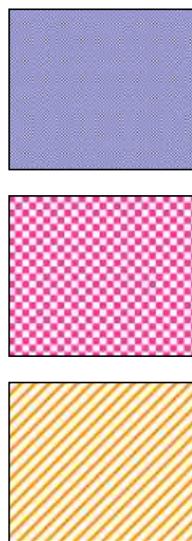
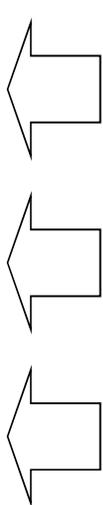
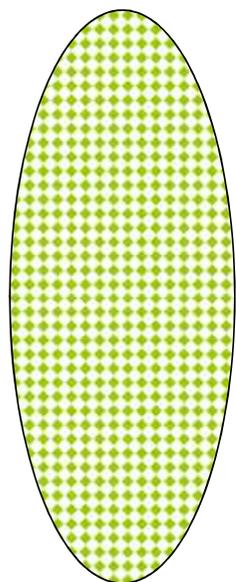
(4. 4)-2 「違い」を生かす

分析

違いを見つけて分けて行く



統合



違いを生かして
新しい価値をつくる

「分析」はこれからも重要な手法であるが、違いを切り捨てていく面があることに留意。

(4. 4) -3 討論について



何かを一緒に行うためであり、議論で相手を打ち負かすのが目的ではない

相手と自分の違いを知り、相手が納得するように説得する

自分の主張を通すのが目的ではない
主張を通して相手が納得していなければ、実行の協力を得られない

相手の違いを理解し自分も変わる

多様性を生かすことができるようになる。

(4. 4) -4 YESかNOかについて



二つの意見を示しどちらか一つを選ぶことを迫るやり方は、一方を否定することになる

結果、否定された方は共感できず協力しにくい

相手をカタマリで見て否定する

例) だから日本人は。だから外国人は。

さきほどの「討論」と同じように、お互いの違いを知り、そこから新しいものをいっしょにつくることで全体が共感し、さらに進む

多様性を生かすことができる。

設問-1

「多様性」は一人一人が違う考え方や生き方を持っていることですが、一人一人が違うとなぜ良いのでしょうか



もし全員が自分と全く同じ生徒ばかりいるクラスだったら…

自分が変わる必要に気が付かない

「多様性」は一人一人が違う考え方や
生き方を持っていることですが、
一人一人が違うとなぜ良いのでしょうか



自分と異なる人がいることで
自分と比べて、自分の良いところ、
良くないところを、考えることが
できる… 自分の考える力を高
められる

また、相手の良いところを知る
ことができ、相手を尊重すること
ができる

設問-2

「〇〇ファースト」「〇〇第1主義」って?...

~~1st (ファースト)~~

1st (ファースト) 以外を否定する
ならば、その考え方は、

~~2nd (セカンド)~~

多様な一人一人を大事にしなくなる

~~3rd (サード)~~

→自分と全く同じ生徒ばかりいるクラス

1st (ファースト)

1st (ファースト) も2nd (セカンド) も
3rd (サード) も違いを尊重し合う
ことで、協力し合うならば、

2nd (セカンド)

3rd (サード)

多様さから新しいことを創ることが
できるようになる

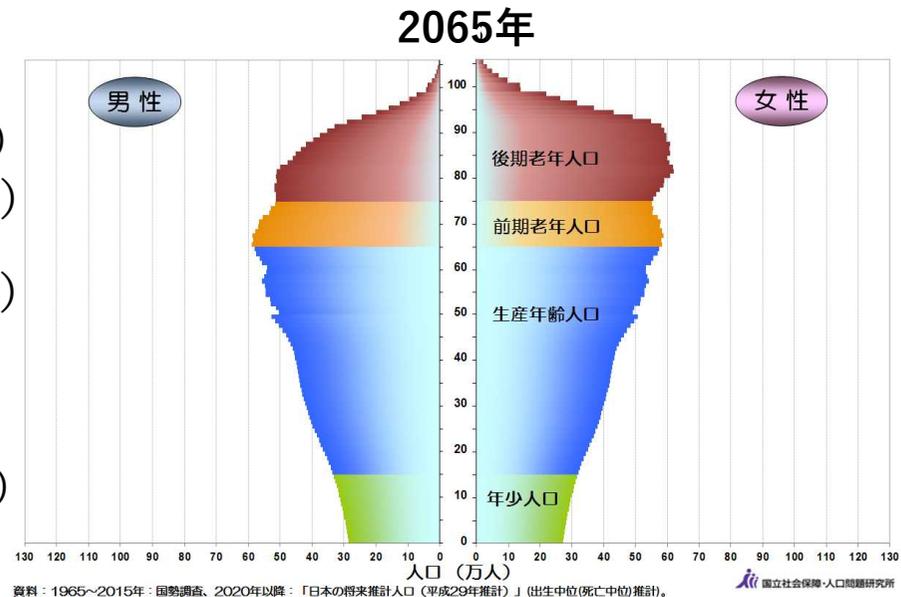
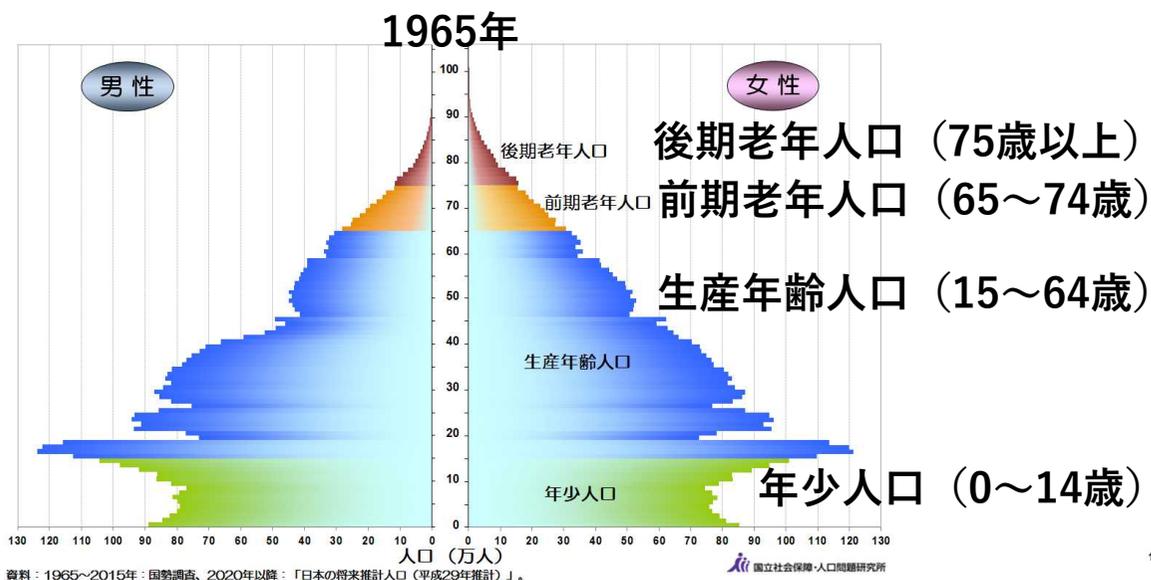
**5. 20年先につなげる外国人との共生
(私見ですが…)**

(5. 1) なぜ「20年先」？

① 今の小学生～大学生が20年後、日本社会の中核人材になる
⇒ 多様性を認め合う教育が大事

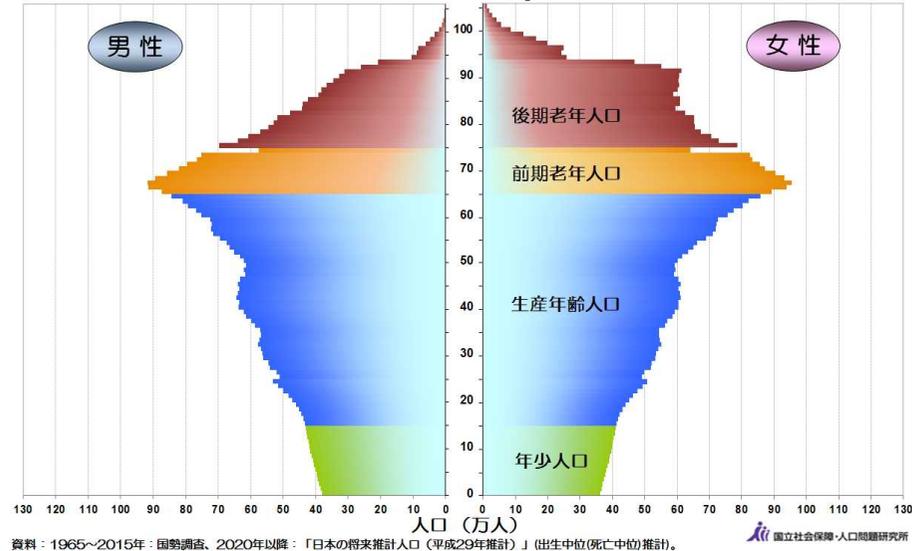
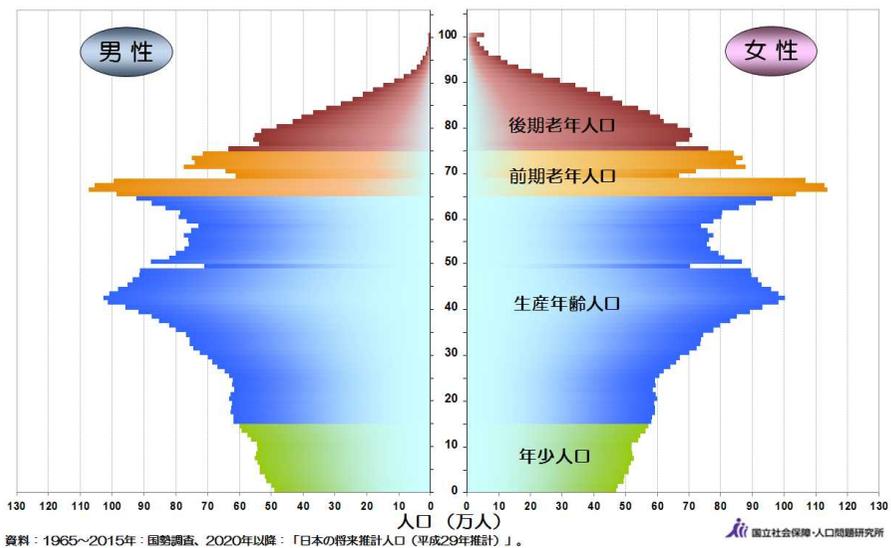
② 日本社会の課題 ⇒ 従来の延長では行き詰まる
少子・高齢化 国と自治体の莫大な借金 格差の拡大

③ 次の世代への責任 ⇒ 将来に向けた「投資」が必要



【日本の人口ピラミッド】

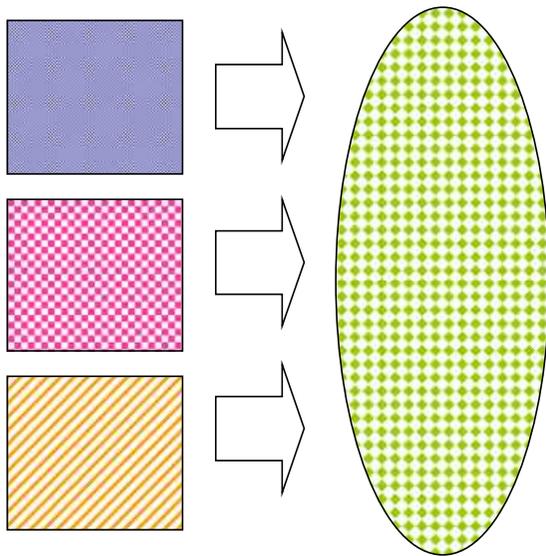
出典： 国立社会保障・人口問題研究所資料



(5. 2) 少子・高齢化が急速に進む日本で目指す国の姿 ⇒ 「質の高い日本」

違いを活かして
新しい価値をつくる

統合



「質の高い」とは、「新しい価値を創造する力」
が豊富にあること

～新しい仕事生まれやすく、
新しいアイデアが創られやすい～

対象分野：

例えば

- ・ 地球規模の生存にかかわること
- ・ 人と人のつながり作り

(5. 3) 教育の力が外国人を20年先につなげる

教育の機会保障と教育費への 国・自治体・企業の**投資**

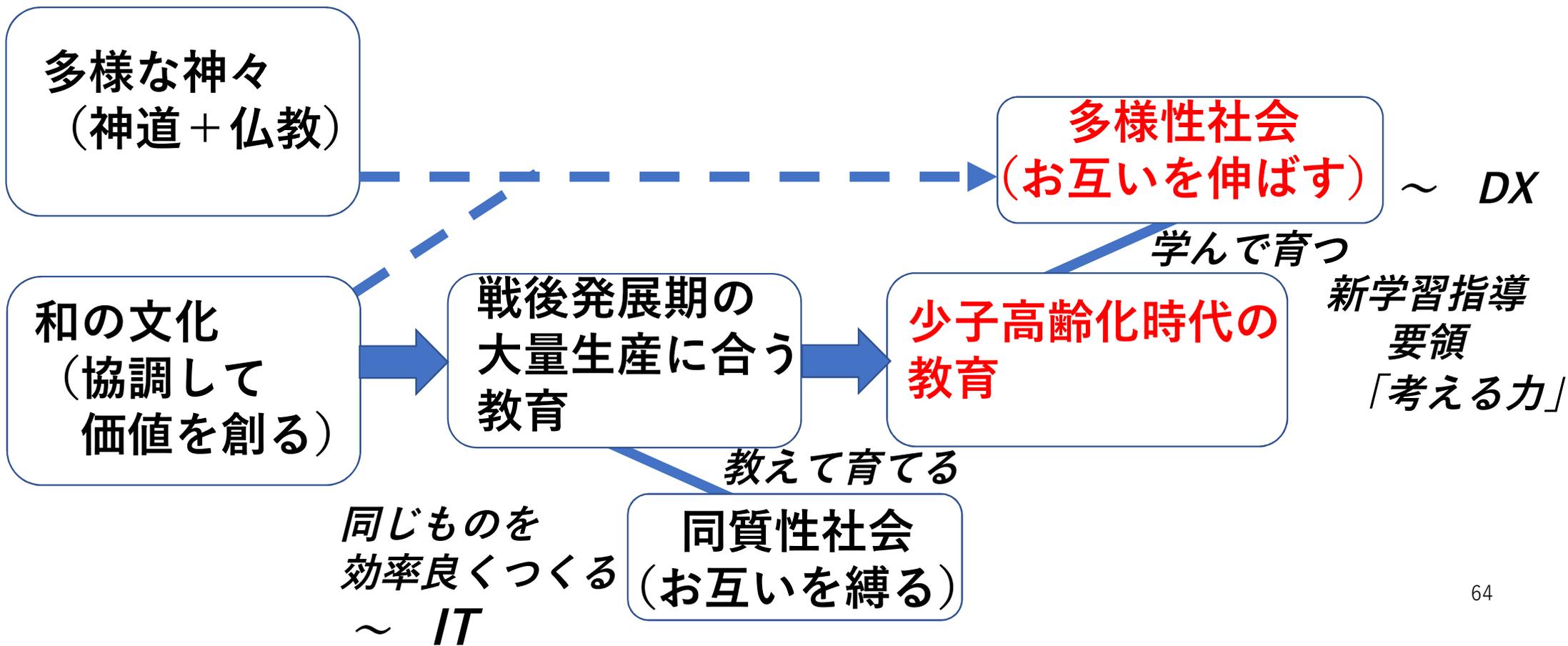
 多様性を生かせる高技能人材の増加 税金 > 社会保障費

幼児期 小学生 中学生 高校生 大学生 社会人

- ① **日本語学習** ⇒ 日本人と外国人の**コミュニケーションが成立**
- ② 教科学習 ⇒ 創造する力の習得
- ③ 家計の教育費負担の軽減 ⇒ 二人目、三人目の子どもも可能

- ・ 企業も日本語教育の費用を拠出
- ・ 民間（NPO等）を活用した教育（日本語、社会制度）

(5. 4) 20年先につなげる日本社会の教育の発展



予測困難な時代に多様性を育てる

日本が目指す10年後、20年後の社会
(多様化社会により新たなアイデア、
新たな企業が生まれやすい)

多様化の広がり

文部科学省

大学共通テスト

「知識の量」
⇒ 「考える力」

大学・専門学校

新学習指導要領

「教えて育てる」
⇒ 「学んで育つ」

幼稚園・小学校・中学校・
高校

群馬県

- ・総合計画（20年先）、
基本計画（10年先）
新常態と
DX（デジタルトランス
フォーメーション）
- ・多文化共生・共創
「群馬モデル」
多文化共生は多様化を
広げる道具

教育機会
の場

多様性育成
の場

日本社会の基本
を学べる場

多様な人材が広く入学できるように

(5. 5) 外国人が増加する時代の日本人に望まれること

① 多文化共生は受け入れ側の対応次第

- ・ プラスになることを積極的に得ようとする姿勢。上から目線（見下す）では得ることができない。なんらかのリスペクト（敬意）が必要。
- ・ 待ちの姿勢ではお互いに分離のまま。

【得る対象（例）】

言語
料理
スポーツ
アート
人として

文化の違いによる発想

② お互いを相手の価値観で知ろうとすること

多文化共生（多様性）は
「創造力が豊富な地域や日本」を
つくるエネルギーになるでしょう